この先どんなに ICT が発達しても、人の営みは変わらない。「高齢になっても、障がいがあっても、この街で暮らし続けるために」人と人が繋がって、しぶとく地域で生き残っていこうではないか！

（暮らしネット・えん副代表／加藤真弓）

えんと私の20年

暮らしネットえん設立20周年を記念して、何かやらなくっちゃ！チラホラと声はきこえていたが、忙しさに紛れて日々が過ぎていった。こういう時黙ってないのが立ち上げメンバーでもある初代ケアサポートえん管理者の加藤真弓さんである。裏方は私がやるから…と一本釣りされ、20 周年実行委員会の立ち上げと委員長を任された。各部署から実行委員を選出し、入職3ヶ月から 20 年以上まで計14名でのプロジェクトとなった。それぞれ意見を出し合い「利用者、地域に支えられて大きくなったえん」という想いで、どこへ向けて行うかの目的を明確にした。決まったのが、記念植樹と、えんの「障害があっても高齢なっても地域で共に」の理念を伝え、これまでの経過、現在の事業全体の様子や紹介、えん職員・利用者・地域住民に向けた映像制作が決定した。

植樹式は3月31日の年度内ギリギリに実施（表紙参照）、映像の制作は、かつてえんを取材されたご縁から、元NHKディレクターの迫田朋子さんに協力をお願いした。

私が入職したのはえん設立1年後の 2004 年、子供が 3 歳になる前だった。大阪出身の私は、慣れない地での生活と知人さえもいない中、毎日寂しい日々を過ごしていたが、えんに勤めてから同じ地域で暮らす利用者さん、共に働くヘルパーさんたち（お母さんもお姉さんも沢山いた）、保育園に通う子供の親同士の交流もあり、この新座という土地に慣れ、今は大好きな土地となった。思い出深い利用者さんやボランティアさん、共に働く仲間との別れもいっぱい経験した。悲しい悔しい嬉しい涙を流し、たくさん笑ってもきた。

植樹式の最後に加藤副代表が「今から20年後、私はもうこの世にいないでしょう、空から見ていると思います」と話された。ボランティア時代からの 30 年の重さと、背中を見てきた先輩方がいつまでもそばにいてくれる訳ではないこと、これからえんを自分がどう関わっていくか、少しの不安と責任感。そんな私も今年で勤続 20 年目に入った。入職当時からずっとかかわってきた、えんができるきっかけになった全身性障がい者のお2人が地域で今も元気に過ごされている。この新座という地でえんがずっと根付いていけるよう、次の 20 年に向けてまずは自分が健康で元気にいたいと思う。

（ケアサポートえん／西本由美子）